

作者のことば

古代の出来ごととして歴史の教科書には「大化の改新」が出てきた。日本書紀の記述どおりに蘇我入鹿を弑した葛城王子(中大兄)と中臣鎌足が主役で、その後、政治改革を断行したということになっている。

一九六〇年代になり「大化の改新」はなかったのではという疑問が歴史学者のあいだから提出され、日本書紀の記述は正しくないという主張が多くの人たちに受け入れられ議論された。日本書紀によれば班田収授の法が実施され、区分田が人々に与えられている。律令の中心となる決まりであるが、戸籍もできておらず、まだ中央集権政府になっていない時代であるから、とうていそれが実施されたとは思えない。

では、入鹿殺害後の難波の津に移った新政権は、どこまで改革を進めたのか。実際には不明な点が多く、歴史学者のあいだでも定説はないようだ。律令国家が成立するのは、このときから半世紀以上経ってからである。さまざまな改革の積み重ねと試行錯誤、そしてそれぞれどころではない緊急事態の発生など紆余曲折があり、壬申の内乱後によりやく律令制度の構築作業が日程にのぼっていく。

入鹿殺害と改革の主役は葛城王子と中臣鎌足、という日本書紀の記述は疑わしい。権力者を倒すのはこの二人が中心であって、蘇我石川麻呂が脇役であるというのはむりがある。権力奪取にともなう暴力行使を若い王子と中級氏族の出である三十歳を過ぎたばかりの実績のない男が主導したとは考えにくい。

では、どのような展開だったのか。入鹿殺害を主導したのは石川麻呂であり、その後に、朝廷の主導権を握ったのは国博士だったのではないか。それにより律令国家の成立が朝廷の目標として掲げられ、受け継がれていく。隋や唐で学んだ国博士が改革の方向を示し、それ以降、通奏低音のように朝廷のまつりごとに影響し、律令制度が確立するものがつくられた。その契機となったのが入鹿の殺害で、いまでは「乙」の変と呼ばれている。

この後、京は難波の津に移り、さらに飛鳥にもどってきたときの飛鳥京は、それまでの王宮とは異なり、宮都に相

応しい京みやこになる。それを主導したのは宝姫(皇極帝)である。彼女自身が改革に熱意を示したとは思えないが、王権を支えた葛城王子や中臣鎌足によって改革の精神は受け継がれた。とくに官人として鎌足はとびきり優秀だった。

ところで、世代を超えて受け継がれたものに「特殊である」という考え方があろう。本音と建前というのとはちよつと違い、特別であると思ひ込むことによって現実を直視しない姿勢をとる。海に囲まれたわが国は海外の国との付き合いは特殊である。地勢的に特殊な条件下にあるが、それが特別なことであると思ひ込みたい。特別であると思ひ込むほうが統治しやすいからだろう。

強国の唐と対等であると思ひ込んで、近隣諸国はわが国に従うのは当然であるという態度を貫く。特殊ではなく特別に神に選ばれた国だからである。

無謀と思わずに国をあげて百済を支援するのも、こうした考えがもとにあつて実行された。それで酷い目にあつても、長い時間をかけて根っこに染み付いた考え方は変わらない。本来なら政権が交代し新しい勢力がとつて代わるくらいの状況なのに、支配者は変わらないままである。敗戦による犠牲は、あたかも自然災害による犠牲と同じような受け取り方をして済ませ、反省がない。各地に防衛施設をつくるのも、飛鳥寺の建立に見たのと同じく百済の人たちの指導によつてである。

最大の内乱といわれる壬申の乱の戦死者も驚くほど少ないようだ。戦いの質が諸外国とは違い特殊である。対立に決着を付ける手段が見つからず、戦いという形式をとらざるをえなかった。選挙制度がある国で選挙に大勝したのと同じように、勝者が政権をとつた。日本書紀に戦いの経過がかなり詳しく記述されているが、勇者として讃えられている兵士の多くは敵を実際に倒していない。その程度で讃えられる戦闘だった。「内乱」という言葉で抱く一般的なイメージの戦闘とは違っている。

この時代のわが国に戦いの専門家はいない。強国であると支配層の人たちが豪語しているのに、武人の任務は治安の維持、貴人の護衛や警護が中心である。しかも、治安を乱すのは悪さをする人間だけではない。悪霊やよくない神も人心を惑わすから警護や排除の対象になる。武器を持って殺しあう戦闘は滅多に起こらないから、戦いのプロでない行政官が、いきなり將軍に任命される。これもわが国の特殊なところであろう。

本書の時代は六三〇年代から四〇年ほどのあいだであるが、歌が儀式のなかで特別な位置を占めるようになる。書き言葉が定着しつゝあり、それにつれて歌の表現や言いまわしにも変化が見られる。何かに託して詠うときには、歌にこめられた心情には嘘偽りが無いにしても、物語の要素が入り込んで虚構がまじることがある。のちの歌との違いがあるように思われる。

ところで、本文のなかに歌の話が出てくるが、まつりごととの関係が深く、どのような場面で詠われたのか、さまざまな儀式との関係が無視できない。かといつて、詠われたままの歌を引用するのも、この本の流れのなかでは好ましいとは思えない。物語の内容は当時のものでも、読者は現在の人たちであるから、引用する歌もそれに合わせたか。そのため勝手に大意をとつて本文と同じ調子の文に書き直している。もとより筆者に詩心があるとは思えないから無謀な試みかも知れない。詩になつていないという批判を免れないだろうが、本文の続きで読み進めたほうが全体の雰囲気になつちしていると思つたからだ。なかには、記述の流れで万葉集にない歌(のようなもの)まである。筆者の選択が間違いであると切り捨ててしまわれぬように願っている。

■目次

第三部 宝姫と王家の人々

9

第十章 蘇我蝦夷と入鹿の時代

11

宝姫の母の吉備姫と、彼女に仕える多根／吉備姫と宝姫という母子／唐から帰国した旻法師
／王宮の移転とまつりごとの停滞／新しい王宮の完成と変化の兆し／田村大王の死と宝姫の
即位／朝鮮半島での新たな動き／蝦夷から入鹿への権力の移譲／クーデター計画の進行／王
宮における入鹿の殺害

第十一章 難波の津への遷都と国博士の活躍

50

新大王と新体制の誕生までの経緯／国博士の誕生と軽大王／難波の津に王宮が移転する／古
人王子の殺害および間人姫の太后就任／「御言持ち」の派遣と改革の着手／調査報告と石川
麻呂の反発／旧弊の改革と王族の土地問題／玄理の新羅への派遣／新羅の宰相、金春秋の来航
／次なる改革と官位の制定

第十二章 難波の津と飛鳥の綱引き

96

石川麻呂との対決姿勢を強める／宝姫に仕える鏡媛と額田媛／難波の新しい王宮へ移転／対
抗意識を強める宝姫／国博士を中心とする新たな改革／中臣鎌足の登場と旻法師の死／遣唐
使の派遣と玄理の死／孤立する難波の津の軽大王／軽大王の病、そして死

第十三章 飛鳥の大工事・狂心の渠

144

飛鳥の地の王宮造営計画の進行／王宮施設の工事の開始／施設の造営と大海人王子／新しい
王宮と施設の完成／吉野離宮の完成と国見の儀式／大海人王子の遠征／蝦夷征伐への大海人
王子の同行／有間王子の変／遣唐使の派遣と唐の思惑

第四部 二つの戦い・白村江の敗戦と壬申の乱

187

第十四章 「こま漕ぎの出でな」

189

百済の滅亡にともなう支援対策／長安における遣唐使の拘束／宝姫による那の津への遷都宣言
／宝姫一行の瀬戸内海の船旅／那の津への到着と新しい王宮の造営／遣唐使一行の帰国と道昭
／宝姫の崩御と豊璋王子の百済への帰還／葛城王子、額田媛と飛鳥に戻る／百済支援軍の出發

第十五章 白村江の戦い

231

百済軍の不統一による混乱／白村江における唐の攻撃／全滅に近い大敗北を喫す／州柔城の陥落

第十六章 敗戦後の立て直しと国防

257

壊滅的な敗北の知らせ／葛城王子の動揺と飛鳥の様子／那の津の防御と大海人王子一行の帰
還／敗北による混乱回避の施策／唐からの使節の来航／防御のための山城の造営／唐からの
使節がふたたび来航／帰国した中臣定恵の生と死／近江への遷都計画の浮上

第十七章 近江京における葛城大王

295

葛城大王の即位／近江京における新しいまつりごと／新羅使節の突然の来航／中臣鎌足の病
と死／大友王子の太政大臣就任と唐の使節の主張／葛城大王の病の波紋／唐の使節の要求と
朝廷の対応／葛城大王の崩御

第十八章 壬申の内乱

340

吉野宮からの脱出行／大海人王子の蹶起を知った近江朝廷の対応／大海人王子一行、美濃へ
急ぐ／近江朝の戦闘準備の模様／飛鳥における戦いの開始／近江朝軍の美濃への進軍と混乱
／畿内における両軍の攻防／飛鳥における両軍の激突／大海人王子軍の有利な戦い／最終決
戦前夜の大海人王子／瀬田橋を挟んでの両軍の対決／戦いを終えて

■飛鳥京物語 蘇我稲目と馬子の時代／目次

プロローグ

第一部 蘇我稲目の時代

第一章 若き大臣の誕生

第二章 蘇我大臣の国づくり

第三章 百済の支援要請と任那問題

第四章 稲目大臣の晩年

■飛鳥京物語 律令国家への道／目次

第五部 大海人大王の時代

第十九章 飛鳥での新しいまつりごと

第二十章 「大王は神にしませば」

第二十一章 「卑母拜令禁止令」と後継者問題

第二十二章 さまざまな政治改革の始まり

第二十三章 大海人大王の病と死と

第二部 嶋大臣(馬子)の時代

第五章 異例つくめの若き大臣の誕生

第六章 訳語田大王を取り巻く人たち

第七章 女帝の誕生と飛鳥寺の建立

第八章 遣隋使という異国体験

第九章 嶋大臣の長き晩年

第六部 律令国家への道

第二十四章 讚良姫大王の即位

第二十五章 新益京への遷都

第二十六章 律令国家の成立

第二十七章 呵瑠天皇と藤原不比等

第二十八章 女帝の時代と平城京への遷都

エピローグ
参考文献

第三部 宝姫と王家の人々

第十章 蘇我蝦夷と入鹿の時代

不安定な安定、とでもいったら良いのだろうか。先の大
王の炊屋姫(推古帝)がみまかった次の年、西暦六二九年に
即位した田村大王(舒明帝)の十三年間は大きな波風が立た
なかった。

何度か王宮のある場所が移動し、大王の発願による官寺
の建設が大きな出来ごとといえるくらいで、新しい大王と
大臣は、これといった施策や改革を打ち出さなかった。
稲目と馬子の時代とは違って朝鮮半島での戦争や争乱がな
く、どの国からも支援要請や圧力がからなかった。こん
な時代が十年以上続くのは珍しい。

三十六年に及ぶ炊屋姫大王という女帝の治世のあと男の
大王となり、まつりごとが変わるかも知れないという観測
が一部にあった。しかし、田村大王は積極的な姿勢を見せ
なかった。

それは大臣も同じだった。祖父の稲目と父の馬子の二人
により確立された大臣の権威に頼り、蘇我蝦夷はまつりご
とをリードしなくとも群臣たちから一目置かれた。群臣会

議を欠席しても、また長く開催しなくても批判する声は大
きくならず、病弱でもつとまった。

朝鮮半島の国との関係でも、紛糾のもとになっている
「任那問題」に関して変化はなかった。

嶋大臣の最晩年、政治空白の時代に起きた新羅の「任那
使節の派遣中止問題」が発生したときに、境部摩理勢によ
る新羅への派兵計画という暴走が実行寸前まで及び、その
ことが新羅への強いメッセージとなった。任那の使節を別
立てにして送る重要性が新羅に伝わり、不本意であるにし
ても新羅は任那の使節の派遣を怠らなくなった。百濟や
高句麗も定期的に使節を派遣してきており、どの国との関
係も悪化せずに済んでいた。

朝鮮半島の国々で戦いがなかったのは、隋に代って全土
を統一した唐が、国内体制の確立に忙しく高句麗に目を向
ける余裕がなかったからで、高句麗王も枕を高くして眠れ
る時代が続いた。

変化といえるのは、飛鳥寺の建立以降、百濟や高句麗か

らきた僧侶たちが仏法界を指導する時代が終わったことである。影響を与えた高句麗や百済の高僧たちは、帰国したり亡くなったたりして世代が交代した。彼らが果たした指導的な役割は、隋や唐で学んで帰国した惠光と惠光に受け継がれた。二人が飛鳥寺の住職になったときには、百済から来た觀勒が健在であったが、觀勒が亡くなってからは、二人を中心にしてわが国の僧侶による仏法講義が行われた。僧侶の数が増え格付けがなされるようになり、わが国の僧侶が仏法界の頂点に立つようになった。

宝姫の母の吉備姫と、彼女に仕える多根

女帝だった炊屋姫による女人たちの集まりを受け継いだのが吉備姫と、その娘の宝姫である。

吉備姫と宝姫の母は、炊屋姫のように王家の主流の姫ではなかったが、運命のいたずらのように王家の中心的存在になった。吉備姫自身、王家とは縁の薄い出自であるという自覚を持っていたが、父は広庭大王と堅瑠媛のあいだに生まれた桜井王子であるから、立派に王家の血を引いた姫である。それなのに王家とのつながりが薄いと本人が

考えたのは、母が桜井王子の正式な妻ではなかったからだ。桜井王子の子を宿したものの、母は上毛野(群馬県)からきた采女であり、吉備姫が生まれる前に病弱だった桜井王子は亡くなっていた。

身重になった吉備姫の母は、実家に帰って産んで育てるつもりだった。実家のほうも受け入れ態勢を整えていたが、堅瑠媛と嶋大臣が相談して飛鳥で産むように手配した。そして赤子を王家の姫として嶋の庄にある大臣の館で育てることにした。

末っ子である桜井王子の若い死は、母の堅瑠媛にとって悲しい出来ごとだった。せめて忘れ形見である吉備姫を自分の手の届くところに置いておきたいと思い、弟の嶋大臣と相談した。嶋大臣も彼女を不憫に思い自分の娘のように慈しんだ。吉備姫の母は、その後は上毛野にもどっている。

子供のころから聡明さを発揮した吉備姫は、女性として最高の教育を受けた。父母との縁が薄かったものの、なに不自由なく育てられた。自分の生まれた経緯を知った吉備姫は、ひっそりと目立たなく生きていきたいという思いがあった。王家の血を受け継ぎ、蘇我氏と関係があるといわれても居心地の悪さを感じ、尼僧にでもなるのがいいと思うこともあった。

十八歳になった吉備姫は、茅渟王子との婚姻が決まった

ると知って吉備姫は多根を気に入ったようだった。

育ちが良いとは吉備姫のような人というのかと、上品でゆつたりとした立ち居振る舞いや穏やかな笑顔を見せる吉備姫に接して、多根の不安は小さくなった。仕え始めると吉備姫のまわりは華やいた感じがあり、大勢の人たちが忙しそうに立ち働いている様子がときめいた。

多根は嶋大臣と最初にあつたときのことを鮮明に憶えていた。嶋大臣の屋敷に連れて行かれ、吉備姫に仕えるようにという指示を受けた。嶋大臣から顔をじっと見られ「姫を頼んだぞ」と言われた。

続いて多根は、小墾田にあつた王宮に住む大王の炊屋姫に挨拶に連れて行かれた。王宮に足を踏み入れるなど考えられず、多根にとっては恐れ多く身が震えるような高揚した気持ちになり、すっかり固まってしまった。炊屋姫は普通の女人のようによさしく声をかけてくれた。

王宮での歌会に、吉備姫とともに出るようにと炊屋姫から言われて多根は驚いた。多根の大伯父である司馬達等が仏法に関して大王や大臣に貢献しており、その功績が評価されていると知った。何度か王宮に行くようになり、ようやく炊屋姫の前でも普通に振る舞えるようになった。

大王の炊屋姫が開く集まりに出席するのは、多根にとって楽しみとなった。珍しい菓子を用意し、手に入った書物

と大臣から告げられた。嶋大臣は王家と蘇我氏の結びつきを意識して有力な王子に自分の娘を次々に嫁がせたが、王子すべてに見合うだけの適齢期の自分の娘がいなくなり、吉備姫も同様の役目を果たすように言い渡された。彼女が嫁いだのは茅渟王子である。嶋大臣は自分の娘たちと同様に、嫁ぐ吉備姫のために新しい館をつくり、茅渟王子を迎え入れた。

茅渟王子は田村王子の異母弟であるが、母が近江から来た采女であり、有力な大王候補ではなかった。有力候補だった厩戸王子に代って田村王子を次期大王候補にする意向を嶋大臣が示し、それにつれて弟である茅渟王子の地位も引き上げられた。

吉備姫が茅渟王子に嫁ぐと決まったときから仕えたのが多根娘である。吉備姫の話し相手しながら身のまわりの世話をするために選ばれた。嶋大臣の権勢の盛んな時期である。

尊い女人のそば近くに仕えるには、身元が確実に教養があることが条件だった。女の子を産んでいた多根は夫と死別しており、娘を実家に預けて吉備姫に仕えた。多根は嶋大臣に仕えた司馬氏一族の娘であり、わが国で最初に僧尼になった善信尼は従姉妹である。子供のころに遊んでもらった記憶があった。教育を受けていて好奇心も旺盛であ

を披露し、ときには皆で写経した。新しい書物のなかに、それまで目にしたことのない漢字があれば書き写して憶えた。それぞれが書いた文字を見せあい、上手に書くにはどうしたら良いか楽しく賑やかに話す。何やらむずかしいと思われる漢字を、一つひとつ意味をとってわが国の言葉として一緒に読んでいくのは楽しかった。

*

多根には、炊屋姫の主宰する集まりで強く印象に残った出来ごとがあった。

炊屋姫が亡くなる三年前(西暦六二五年)、遣隋使として派遣されて帰国した恵日を集まりに招いたときである。恵日は十六年ものあいだ隋と唐に滞在して学び、進んだ文化や仕組みに接していた。唐の王都の話をし、次いで唐の詩に言及した。炊屋姫が興味を持っていると思い、唐から本を持参し炊屋姫に披露した。陶淵明という詩人が書いた漢詩の本である。

炊屋姫が興味を持って手に取り、恵日と二人で話した。

炊屋姫は珍しく他の人たちがいるのを忘れ、恵日との会話に夢中になった。恵日が漢詩を朗読し、内容を噛み砕いて解説すると、炊屋姫は熱心に聞いた。炊屋姫が問い、恵日が応え二人の会話が続いた。周囲の人たちは黙って二人の

やりとりを聞いていた。多根も熱心に耳を傾けた。と、感極まったように炊屋姫が涙を流した。

二人を見守っていた人たちが驚いた様子に、炊屋姫もハッとしように周囲にいる人たちを見た。そして、そっと涙を拭いながら「何でもありませんよ」と言った。そんなはずはなかった。

陶淵明の漢詩表現のみごとさに感激したのは明らかだった。こうした表現方法があることをもっと早くに知りたかったという思いが強くなり、急に涙がこみ上げてきたという。自然や人生、宮仕えをはなれ農業を営む生活が謳われ、酒を飲んで詠んだ詩だった。それまで炊屋姫が接してきた形式張った書物とは異なり感情が豊かに細やかに表現されていた。

陶淵明の詩は、淡々と景色や自分の行動を語りながら、深い想いが行間からにじみ出て哀感を誘った。何気ない表現が深く感情や感覚を刺激する。表現が巧みで心に突き刺さる世界が広がっていた。詩には無限の可能性があると教えられた。

多根にも炊屋姫の感激が理解できたものの、そうした表現に感動して涙する炊屋姫の感受性の鋭さに感心した。

どのように表現したら良いか、もどかしい思いを抱いていたときだけに、陶淵明の漢詩に接して答えのヒントが得られた。

良いのかも知れないと思うようになりました。息子を死なせた悲しみを経験した人はたくさんいます。歌にして吐き出せば、少しは悲しみが和らぐかもしれません。もっと早くに分かればよかったです。なにやら手遅れのように思えて悲しくなるときがあります。この気持ちが分かりますか」

吉備姫がうなずいた。誰もが悲しみを持っているのだと、そばで聞いていた多根は思った。わが国の頂点に立つ大王さえも。

多根は身がふるえるほど気持ちが昂った。歌というのは個人的な感情を溢れ出すように表現するものなのだ、いままさながら思い当たった。そういえば、市ときに謳われる「歌垣」で話題になった歌は、自分の気持ちをうまく表現したものが多かった。

この後、「歌垣」と陶淵明の漢詩が結びつけられて見直された。市で評判になった「歌垣」も、かつては感心していた表現でも単純で底の浅い歌に見えたり、何気ない表現が気持ちを深く表していると思えたりと、評価の基準に変化が生じた。

歌をつくって披露しあう機会が多くなった。心にしみる表現をするにはどうするのか、自然に心が動くようになって。耳に心地良い響きも大切だった。言葉と言葉をつなぐ

集まりのあと吉備姫と多根だけが残ったときに炊屋姫はしみじみと語った。

「わらわも年をとりました。このころになって、しきりに亡くなったわらわの産んだ王子(竹田王子)の姿が思い浮かぶのです。もう何十年も昔のことだというのに、悲しい気持ちはそのころと少しも変わらないのです。いえ、歳をとるにつれて悲しみが増してくるようです。隠してきたのは大王という立場があるからで、どのように振る舞っているか分からないときもあるのですよ」

いつもの炊屋姫と違う感じがして多根は驚いたが、さりげなく振る舞っているように見えても、大王という仮面をかぶらざるを得ないときもあるのかと思うと、やるせない気分を味わった。

「王子が亡くなったときには、わらわは仏にすがり法会を開いて祈願しました。王子の魂もはずまり、わらわも慰められると思いましたが、心のなかにたまった悲しみの澱のようなものまではなくありませんでした。このころになって、正直に自分の悲しい気持ちを隠さずに表現したほうが

場合も、流れるような言いまわしにすると良い。とはいえ表現するのはむずかしかった。それだけにおもしろみも大きかった。誰かがつくった歌を詠み上げ、それに応えて誰かが返して歌うこともあった。

集まりの後で言い残したことを記し、やりとりされた。なかなか手に入らなかった紙も、炊屋姫が都合してきたので手紙を書く贅沢が許された。

自分のつくった歌を詠み上げるようになって、多根は目立つ存在になった。言葉の使い方が巧みで、さりげなく風景やできごとのなかに情感が籠められた印象を与え、ときに炊屋姫から誉められた。

炊屋姫自身が、自分の悲しみを主題にした歌を披露することはなかった。多根は、いつか詠われるのではないかと思っていたが、ついに詠われなかった。嶋大臣が亡くなったから炊屋姫は気力が少しずつ失われていくように見えた。そして、吉備姫が集まりの主導権をとるようになった。自分から率先してリードするタイプではない吉備姫は、炊屋姫のいだいていた悲しみを理解し、集まりの核となる存在になった。それを多根が支え、集まりの方向を示すようになった。炊屋姫のまいた種が芽を吹き育てられていった。

異母兄である田村王子に、自分の娘が嫁ぐのは違和感があった。娘とは義理の姉妹という関係になる。理不尽な仕打ちに思えたが、王家や蘇我氏が栄えるためであるといわれ、炊屋姫が承認したから従わざるを得なかった。田村王子が即位すれば宝姫が太后になる。自分のあとの女人たちの集まりを主宰する吉備姫と宝姫の母子が、朝廷のなかで高い地位にいるほうが良いと炊屋姫は考えたようだ。

吉備姫の不安とはうらはらに、宝姫は覚悟を決めて田村王子に嫁いだ。母の吉備姫より王家に生まれた身の宿命を悟っている態度だった。好奇心の旺盛な宝姫は困難に立ち向かう姿勢があった。

「わらわが、まるで不幸のどん底に陥るように嘆いておられますが、そんなことはないのですよ。わらわのことを心配するよりも、ご自分の健康についてもっと気を使ってください。多根も母上がよく眠っていないと心配していますよ」と宝姫は、逆に母に気を使った。

せめてもの願いとして、宝姫のための新しい館は、自分の住む館の近くにしてもらうように吉備姫は大臣に頼んだ。吉備姫の館は飛鳥の嶋の庄にあり、嶋大臣が住んでいた館のとなりだった。宝姫の館も飛鳥にあれば毎日でも顔を会わせ様子を見られて安心できると思った。

田村王子に嫁いだ翌年に、宝姫は葛城王子を産んだ。法

吉備姫と宝姫という母子

田村王子が大王の有力候補になり、宝姫が田村王子に嫁ぐと決まると、吉備姫と宝姫の母子の環境も変化した。

吉備姫には宝姫と軽王子という二人の子供がいたが、十八歳になった宝姫は傍流にいる高向王子に嫁いでいた。翌年に漢王子が生まれたというのに、宝姫は、高向王子のもとを離れて田村王子に嫁ぐように言われたのだ。

田村王子に嫁いでいた嶋大臣の娘である法提郎媛が亡くなり、そのあとを宝姫が継ぐように言われたのである。法提郎媛は古人王子を産んだあと二人目の娘のお産の際に亡くなった。病気の嶋大臣に代わってまつりごとを取り仕切っていた蝦夷が、炊屋姫大王と相談して宝姫を選んだ。蘇我氏との関係が深く、大王家の血筋を引いている姫となれば、年齢的に見て宝姫がもっとも相思しいという判断だった。

高向王子はあまり丈夫ではないというものの二人の仲も悪くなかった。その仲を裂いてまで田村王子に宝姫を嫁がせるといふのは、吉備姫には考えられなかった。当の宝姫も突然、夫と別れて違う王子に嫁ぐように言われても戸惑うばかりだった。

茅渟王子を夫に持つ吉備姫にとって、歳を離れていない

提郎媛が産んだ古人王子とは腹違いの弟になる。その二年後に間人姫が生まれ、五年後に大海人王子が生まれた。葛城王子は兄と弟に挟まれ中大兄王子とも呼ばれた。西暦六二六年、嶋大臣の死んだ年に生まれた葛城王子は、大臣の生まれ変わりではないかとも言われた。

炊屋姫のあとを継いだ田村大王が即位して一年後、宝姫は太后になった。予定どおりであるのに、吉備姫は自分の娘が太后になったことが信じられず、ふたたび不安な気持ちが大きくなった。

「どうか落ち着いておすわりください」と多根が声をかけたのは、取り乱すことなどない吉備姫が、落ち着きなく館のなかを行ったり来たりしていたからである。新しくつくられた王宮で祝の宴が開かれていたが、吉備姫は出席する気にはならなかった。

「分かっていますが、何か胸騒ぎがするのですよ。皆は、わが娘が太后になるのをめでたいと言っていますが、わらわにはめでたいことには思えないのです」と眉に皺を寄せて吉備姫が言った。心を許している多根の前だけでしか見せない表情だった。

長いあいだ吉備姫に仕えている多根は、吉備姫の気持ちや考えが誰よりも分かっており、吉備姫も彼女には包み隠さずに何でも話し外見をとりつくるおうとはしなかった。

周囲からは吉備姫の感じている不安は、贅沢な悩みにしか見えないだろうが、多根にはよく分かった。吉備姫の母も、嫁いだ茅渟王子の母も采女だった。自分の身分は高くないという自覚があり、自分の娘が王家の最高位に着くのはあり得ないと思えたのだ。

当の宝姫は、それほどの不安を感じていなかった。「大后になったからといって、わらわは少しも違っておりません。今まで通りにするだけです」と宴に出て館に戻ってきた宝姫は、吉備姫の不安を一掃するように言った。先に嫁いだ高向王子とのあいだに生まれた王子は、幼いうちに亡くなっていた。大人になってからの経験では母の吉備姫よりも勝っているだけ、宝姫は覚悟ができていたように多根には思えた。吉備姫は四十歳代半ば、宝姫も二十歳代半ばになっていた。

*

田村大王が即位した翌年(西暦六三〇年)十月に飛鳥にある岡本宮が完成し、それまで住んでいた磐余にあった仮宮から移ってきた。王宮は炊屋姫の小墾田の宮とほぼ同じ大きさである。

大臣の館は豊浦にあり、王宮とは至近距離である。王家と蘇我本宗家の一体感が強まった印象を与えた。

期間滞在するときは、有馬の湯に行く道に警護の人たちが護りを固め、毎日のように新鮮な食べものが運ばれた。飛鳥とは頻繁に連絡が取られたが、宝姫はのんびりと過ごした。しばらくのあいだは、母の吉備姫が心配するほどのこととはなかったのである。

唐から帰国した旻法師

遣隋使とともに隋で学ぶために派遣された旻法師が、唐から帰国したのは田村大王の治世四年(西暦六三三年)である。成人したばかりのときにわが国を離れた旻法師も、帰国したときには四十歳代になっていた。先に帰国した恵日(けいじ)が熱心に朝廷に働きかけ、遣隋使の派遣が実現した。恵日が帰国できないでいる人たちを連れ帰ろうと、自らも遣隋使に加わり、新羅も協力してくれた。

帰国した旻法師は特別待遇を与えられた。先に帰ってきた留学僧たちは飛鳥寺の指導的な僧侶として活躍していた。旻法師は留学僧でありながら儒教をはじめ幅広く学問を学んできたので、月に四、五回ほど若者たちに教え、大王や王子から声がかかると個人的に対話するかたちで自分の知識や考え方を語った。僧侶として一日に二回の読経を欠かさなかったが、そのほかの時間は自由に過ごした。

「蘇我氏の血筋でない大王だというのに、まるで蘇我腹の大王のようではないか」と口さがない人たちは噂した。大后となった宝姫も飛鳥に住んでおり、母である吉備姫の館もあり、田村大王が蘇我氏とは一線を画していた彦人王子を父に持つだけに、よけいに蘇我氏に取り込まれたように思われた。

成人するまでは注目されず過ごしていた田村大王は、厩戸王子に代って有力な王子になり、生活が一変し贅沢が許されるようになった。しかし、帝王学を教えられないまま大王の地位に就いた。

大王になってからは、豊浦大臣をはじめ朝廷に仕える人たちは、大王に礼をつくし腫れものに触れるように扱った。大臣たちがまつりごとを取り仕切り、承認を求められる大王も、意見を開示したりせず、拒否もせずに形式を踏むばかりだった。

田村大王に嫁いでからしばらく宝姫は平穩に過ごした。宝姫が体調を崩していたとき、大王と宝姫は一緒に有馬の湯に行くなど大王も思いやりを見せ二人の仲も悪くはなかった。

有馬の湯は畿内の摂津地方の山あいにあるひなびた温泉である。山のなかから湯気が高くのぼっているのが発見され、湯治場として知られていた。大王と宝姫たち一行が長飛鳥寺から外に出て飛鳥川に沿ってそぞろ歩きながら、遣隋使とともに隋に行ったときの思い出を出していた。今来の韓人の出である旻法師が遣隋使一行に加わり隋に行ったのは、僧侶になって二年経ったときだった。經典の中身もよく分からなかったが、留学僧として選ばれ喜び勇んで隋に向かった。

隋が広く奥深くわが国とは比較できない大国であるのに驚き、何もかも珍しくて夢のなかにいるような毎日だった。隋の役人が親切にしてくれ、洛陽の都につくられた学問所で学び始めた。新羅からの留學生と一緒に学んだが、わが国からは十人足らずなのに、新羅からはその何倍もの人たちが学んでいた。それだけに、新羅の人たちに負けてたまるかと思っただけ。

最初のうちは言葉も分からずに苦労したが、やがて生活にも慣れ、隋での暮らしが楽しくなってきた。このまましばらくは隋にいたいと思うようになった。次の遣隋使が来たら帰国しなくてはならないと思うと残念な気がした。隋で生活するのが当たり前になり、次第に倭国が遠い世界になつていく気がした。

ところが、隋と高句麗との戦いが始まり、やがて隋王朝を倒そうとする反乱が起こった。あちこちで戦闘が続き、容易に治まりそうもなくなり、わが国からの使節が来られ

る状況ではなくなった。

旻法師は洛陽から長安に移って学んでいた。周辺での戦闘はほとんどなく命の危険にさらされることはなかったが、毎日のようにどこかでの戦闘の話が伝わってきた。隋の軍隊があちこちで敗れる報告が届き、これからどうなるのか不安のなかで過ごさざるを得なかった。

反乱が起きると隋の皇帝は洛陽の都を離れ、戦果の及ばない江南の宮に避難した。旻法師のいる長安には、隋の軍隊の一部と役人たちが残され治安の維持につとめていた。反乱軍がいつ攻め寄せるか不安な状態が続き、やがて北のほうで蜂起した李淵とその息子である李世民の軍隊が長安に向かっているという情報もたらされた。不安は最高潮に達した。

大きな戦闘になると長安の街が焼かれ、住むところを失うかもしれないという心配が現実味をおび始めた。隋のわずかな軍隊ではとても反乱軍に勝ち目があるとは思えなかった。

強力な李淵の軍隊がやってくると、長安の隋軍はすぐに降伏し、実際の戦闘はほとんど起こらなかった。李淵とその息子の世民の軍隊が長安に入り、留まった。彼らが乱暴を働くわけではなく思ったほど混乱は起きなかった。かつて旻法師が学んでいた洛陽では、激しい戦闘がくり

で十年ほどかかった。隋の時代に高い地位にいた人たちが、新しい国になっても有能であれば支配体制に組み入れられた。隋の統治体制は唐に引き継がれた。

旻法師はそれまでどおり留学僧として学ぶ機会が与えられた。

隋から唐に変わるなかに身をおいていて、わが国との違いに旻法師は改めて驚いた。皇帝になっても、良い政治をおこなわなければ地位は安泰ではない。皇帝も天の意志に沿わなければ退場させられ、新しい皇帝に変わる。

わが国のように有力な一族が世襲により高い地位に就くのと違い、個人の能力がもたっている。高い地位に就く人たちは専門分野を持ち、国家の役に立つように教育され任務を果たす。国家を支える組織がつけられ、人民を統治するために法律がつけられている。

官人を民間から採用するために隋から引き継いで科挙制度を実施した。広く天下に優秀な人材を求め国家試験に合格して採用される。身分や貧富の差に関係なく、優秀な人が選抜され役人となる制度である。

ふたたび洛陽で学ぶようになった旻法師は、支配体制を支える思想である「論語」を学んだ。わが国にも孔子の教えは伝わっていたが、その思想がよく理解されている段階ではなかった。彼の地で「論語」に接すると、説かれている考

広げられていると聞き、わが国から留学して洛陽にいる人たちがどうなったのか旻法師は心配した。ほどなく隋の独裁者として権力の頂点にあった煬帝が部下の將軍に殺され隋が亡んだ。戦闘は終息する方向に進んだものの、山間部や国境周辺をあちこちで戦闘が続いていた。平和が訪れるようにならないと帰国どころではない。

そうなると思議なもので、旻法師は帰国したいという思いが強くなった。しかし、海の彼方の祖国は、とんでもなく遠いところだった。

長安に入った李淵が新しく唐を建国し皇帝になったのは西暦六一八年、まだ中国全土を支配したわけではなかった。各地で軍隊を率いて天下を狙う將軍たちが戦っており、彼らが長安に攻め込んでくるという噂が飛び交った。まるで喧嘩しているように声高に、人々は新しい情報や噂を話し合い、旻法師を不安にさせた。

その後、長安は混乱に陥らずに唐の都となった。皇帝となった李淵は高祖と呼ばれた。最高権力者である皇帝の権限は絶大だった。力が国の支配のもとになり、皇帝の意志は国の意志だった。皇帝の兄弟や親類縁者も、敵対する恐れがあれば容赦なく殺され、従うものだけが許される。わが国では考えられない過酷さだった。

戦乱が治まり、唐が中国全土を支配し、平和が訪れるま

えやものの見方が納得いくように感じられた。「忠」や「孝」についての理解は問題なかったが、「道」や「天命」や「友」という言葉の意味するところも唐で学んで理解できた。「道」をきわめるためなら命を縮めても良いと思うほど価値があること、「天命」とは人智を超えた天の意志であり、「友」はともに行動し語り合える仲間のことである。「徳」や「仁」という言葉の持つ深い意味を知り、自分を磨き鍛えるための行動原理であり倫理規範であると知った。さらに、中国の伝統として体系化された易である「周易」について学んだ。旻法師が帰国してから学堂で教えたのは、こうした学問が中心だった。

わが国から来ていた留学僧が、一足先に唐から帰国したという話を旻法師が聞いたのは、隋に来て十六年たったときだった。朝貢に来た新羅の使節が、帰国する際に長安にいたわが国の留学僧たちをともなって帰ったという。

洛陽にいたために置いてきぼりを食い、旻法師は嘆いた。唐の役人のところに行き、わが国や新羅の使節が来る情報があったら、すぐに知らせしてくれるよう頼み込んだ。それから五年以上たち、田村大王の時代になって遣唐使が派遣されたという情報もたらされた。

隋の都であった洛陽にいた旻法師は、唐の都となった長安にわが国からの使節がきていると役人から知らされた。

このときの驚きと喜びは、旻法師にとって生涯忘れられなかった。このまま異国の地で命をなくすかもしれないと思っていたときだったから、世話になった人々への挨拶もそこそこに、使節がいる長安に一刻も早く行くこうと心はあった。

長安に着いて恵日の顔をみた旻法師は、その場に思わずへたり込んでしまった。緊張した気持ちが緩んで立っていられた。泣いているつもりがないのに涙がとまらなかつた。気がつけば、洛陽にいたときに帰国するときを持って行くこうと決めていた書物で忘れたものがあつた。

それ以来、旻法師は恵日の近くから離れられなかつた。恵日の姿が見えないと、自分を置いて帰ってしまったのではないかと、後から考えたらそんなことはないのに不安ばかりが大きくなつた。帰国の旅が始まつたところであろうや平平常心を保つことができた。

このときに唐にいたわが国からの留学僧と留學生のすべてが帰国したわけではない。唐には学問所が散らばつていたので消息をつかめず、高向玄理や南淵請安たちは依然として唐に残されたままだった。このあとしばらく遣唐使が派遣されなかつたから、彼らが帰国するのは、さらに十年ほどのちになる。

罪を犯した僧がいた寺院は、仏法を正しく理解していないのだから、その寺院にいるすべての僧を処罰したほうがいいという意見さえ出された。まつりごとを取り仕切つていた蝦夷も、どうしたら良いか決められなかつた。

相談された観勒は、次のように言つたという。「仏法が伝えられてそれほどの年月が経つておりません。僧たちも、修行して優れた人間にならなくては人々に教える論ずことはできませんが、いまは途中の段階です。ですから、僧といつても普通の人間と変わらないところがあります。寺院ができ、僧侶の資格を得たといつても、仏法の教えを本当に理解するには時間がかかります。かたちだけ整えば良いというわけにはいきません。ですから、今回のような事件が起きることもあり得ます。そうならないように、僧たちはこれまで以上に修行しなくてはなりません。簡単に理想の姿にはなりません。今回の場合は、罪をおかした僧だけを罰して、すべての寺院の僧にますます修行に励むように指示するよりほかに方法はないでしょう」確かにそのとおりだった。僧侶になつてゐるのは特別な人であると信じられたが、人間である以上、僧侶も罪を犯すし間違ひも仕出かす可能性があるという当然のことを、このときに人々は知つたのである。

観勒の指導で、各寺院は、いつ、どのようにできたの

* 帰国した当初は、飛鳥の地も狭くて人々の数が少なく、

わが国は何もかも規模の小さい世界であると旻法師には思えた。唐ではるか彼方まで真つ平らな土地が続き、都市には家々がぎつしりと建つていて賑やかだった。しかし、飛鳥に馴染んでくるにつれて、以前の飛鳥との違いが見えるようになった。

王宮は立派になり早朝から王宮に通つてくる人たちが増えていた。行き交う人たちの服装にも彩りがあつて瑠璃や貴重な石で身を飾り、大王や大臣を頂点とする貴族たちが豊かさを満喫しているように見えた。寺院が増え仏法が盛んになり僧侶の数も増えていた。

旻法師が帰国する前、炊屋姫の治世三十二年四月に僧侶が自分の祖父を斧で殺害する事件を起こした。そのことを旻法師は、飛鳥寺の僧正となつていた百濟から来た観勒から帰国早々に聞いた。

仏の道を説く僧が悪業を犯すはずがないと思われていたから、殺害事件が起きた衝撃は大きかつた。

事件を起こした僧をどのように罰するか。僧は俗世から離れた存在で、普通の人たちと同じように罰していいのか判断がつかず、僧を罪人として裁けるのか疑問と戸惑ひがあつた。

か。どのような僧侶がいるか調査が実施され記録された。

長年にわたつてわが国で暮した観勒は、出身国である百濟よりも次第にこの国のことを中心に考えるようになっていた。わが国の人たちに囲まれて過ごすうちに、自分の出身国の思惑より僧侶としての使命を優先するようになっていた。そのため親愛と敬愛の情を持たれた。そして、観勒が亡くなると、観勒の薫陶を受けた恵背と恵光が飛鳥寺の住職となつた。わが国の仏法界のことはこの二人に任せ、旻法師は若者たちに教えるかたわら僧侶として修行した。

そんな落ち着いた生活をする前に旻法師は唐との違いが目につき、わが国も急いで改革を押し進めなくてはならないと高い調子で人々に話して響きをかつた。政治に強い関心を持つていたわけではなかつたものの、自分が隋に向かつたときの希望に満ちた未来の姿からみれば、この国は後退しているように思えた。朝廷にいる人たちに、もっと進んだ国にするという意欲がないのが信じられなかつた。

豊浦大臣は旻法師の進言も迷惑そうだった。大臣の蝦夷から相談されたのは帰国した直後の一度だけだった。しかし旻法師の意見がいれられたわけではない。

旻法師が帰国したときに遣唐使とともに唐からの使節がわが国にやつて来た。はじめてとなる遣唐使は、唐とは対等の国であるという建前を貫こうとして問題を起こしてい

著者略歴

尾崎桂治（おぎざきけいじ）

東京生まれ。一九六〇年代から月刊誌の編集者として活動。その間、イギリス、フランス、イタリア、ケニアなどに取材で訪れる。その後、出版社を設立。二〇年以上にわたって経営する。主として書籍の企画、編集、取材、執筆などを手がける。かたわら縄文時代および飛鳥時代を中心に歴史を研究。一〇年前に本書の構想を立てて資料をあさり、五年ほど前から本格的に執筆を始め、その集大成として『飛鳥京物語 蘇我稲目と馬子の時代』（三樹書房）を上梓。本書は全三巻の第二巻となる。

飛鳥京物語

白村江の戦いと壬申の乱

二〇一六年一月二五日 初版発行

著者 尾崎桂治

発行者 小林謙一

発行所 三樹書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町一-三〇

電話 〇三(三三九五)五三九八

FAX 〇三(三三九一)四四一八

印刷・製本 シナノパブリッシングプレス

© Keiji Ozaki 2016. Printed in Japan

本書の全部または一部あるいは写真などを無断で複写・複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者及び出版社の権利侵害になります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版權管理部に許諾を求めて下さい。落丁・乱丁本は、お取り替え致します。